◆大乗院の調査―第275次・第278次

1　はじめに

第275次調査は、(財)日本ナショナルトラストによる大乗院庭園整備のための事前調査で、1996年8月5日から9月25日におこなった。調査区は、池の南東部にある三つの島と、池の東岸のうち、平成7年度調査区の北に設定した。調査区の面積は約540m²である。

第278次調査は、チャペル・ウェディング用の教会をホテルの駐車場に建設するための事前調査で、1996年10月15日から12月20日におこなった。発掘区（南北15m×東西12m）は、御所馬場北詰にひらく奈良ホテル裏門の東南側に位置し、旧大乗院御所の西北隅にあたる。

2　大乗院庭園の調査（第275次）

島の調査

三つの島に7本のトレンチを入れ、その断面を観察した。その結果、三つの島のいずれも基本的に、下から、灰色砂礫層(地山)、腐植土層、灰褐土層、黄褐土層、最近の整備による角礫層および表土層という土層の堆積を確認した（図50)。

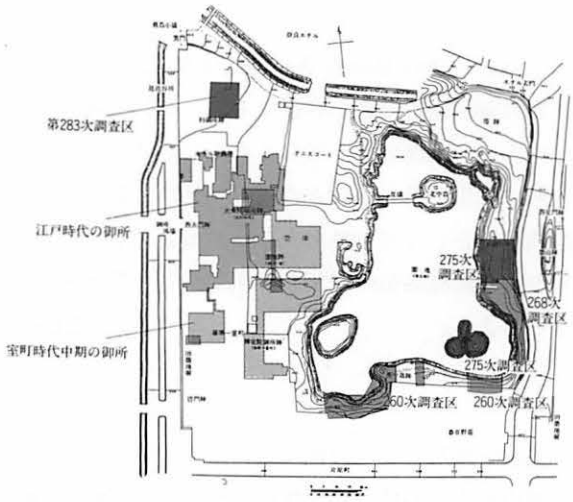

図48　発掘位置図
(1：3000、森蘊『中世庭園文化史』1959をもとに作成)

各層の年代だが、①北島では灰褐土下から地山を掘り込んだ中世末の土器をともなう皿状の土坑（SK6906）を検出したこと、②東島の腐植土層と地山の間に近世の土器を含む砂層がみられること、③灰褐土層は中世末から江戸前半の土器・瓦を含み、黄褐土は江戸後半の陶磁器・瓦を主体に包含し、若干の近代以降の遺物を混在していることなどから、三つの島全体として、灰褐土層を江戸時代前半、黄褐土層を江戸後半～近代と判断した。このため、島の全域で表土層を剝がし、黄褐土層を露出させた。また、島の裾野部にみられる整備にともなう角礫層は、除去すると現状を大きく変えること、識別が容易であることなどから、西島の北西のみを除去するにとどめた。

現在の島は江戸時代以降に構築されたと考えられるが、SK6906の存在より、一部が中世末には形成されていたと推測できる。しかし、その状況は不明である。

東岸部の調査

東岸の調査は、平成7年度調査区の一部を再発掘し、土層の確認をおこなった後、面的に発掘を進めた。その結果、表土層直下の暗黄灰土上で、叩き漆喰による遺構等を検出した。

SX6900　調査区中央を南北にはしる叩き漆喰の道路状遺構。幅約40cm。断続的にSX6902付近までたどれる。

SX6901　調査区東辺の高まりを南北にはしる叩き漆喰の道路状遺構。幅約80cm。南端はSX6902とつながる。

SX6902　外径約3m、内径約1mの叩き漆喰による環状の遺構。漆喰を溝状に掘り、長さ50.8cm、太さ2.8cm,内径2.2cmの鉄管をほぼ水平に安置する。地表下には特別な構造をもたない。また、一部、SX6900上に叩き漆喰を重ねており、SX6900より新しいと考えられる。

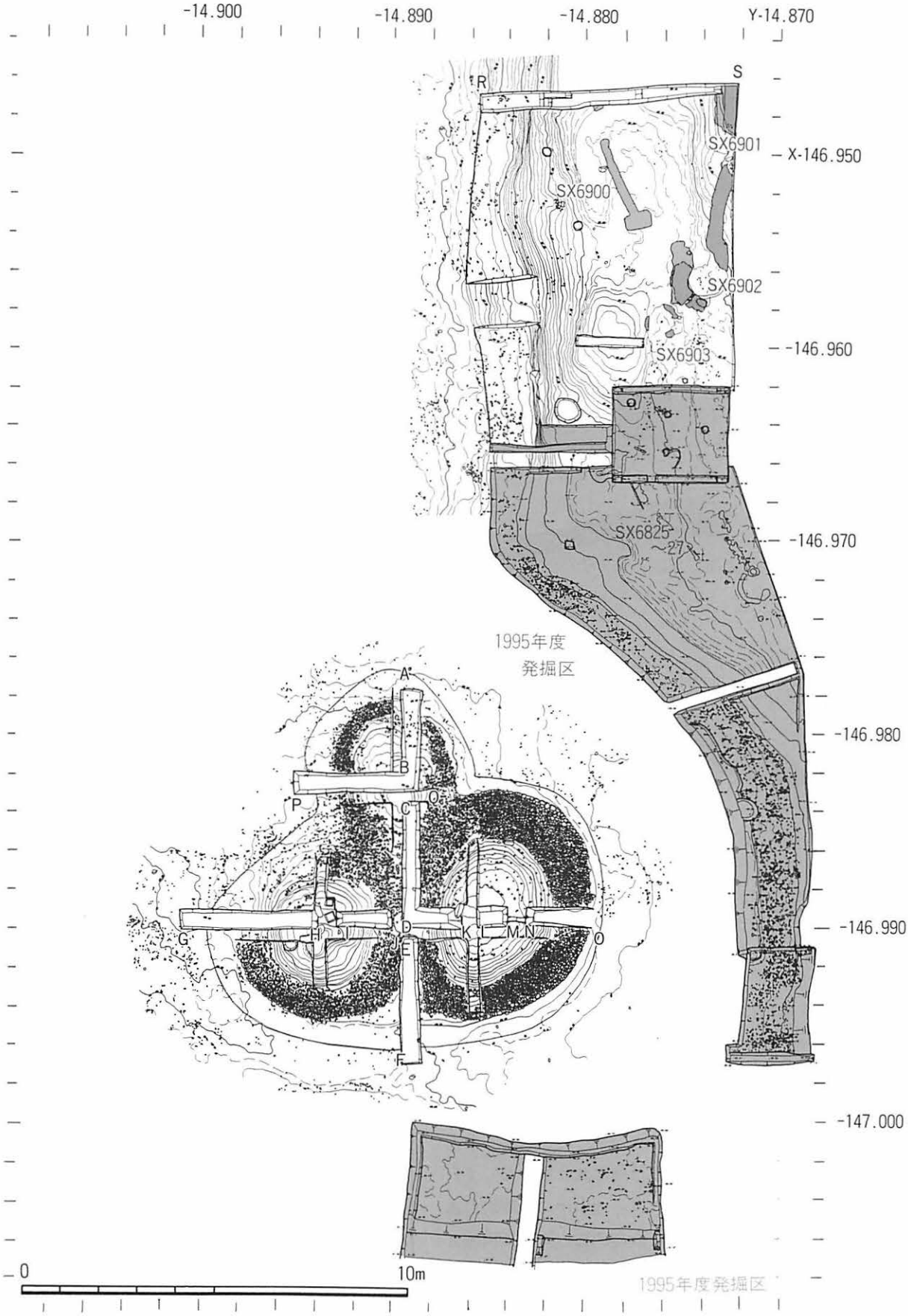

図49　第275次調査遺構平面図

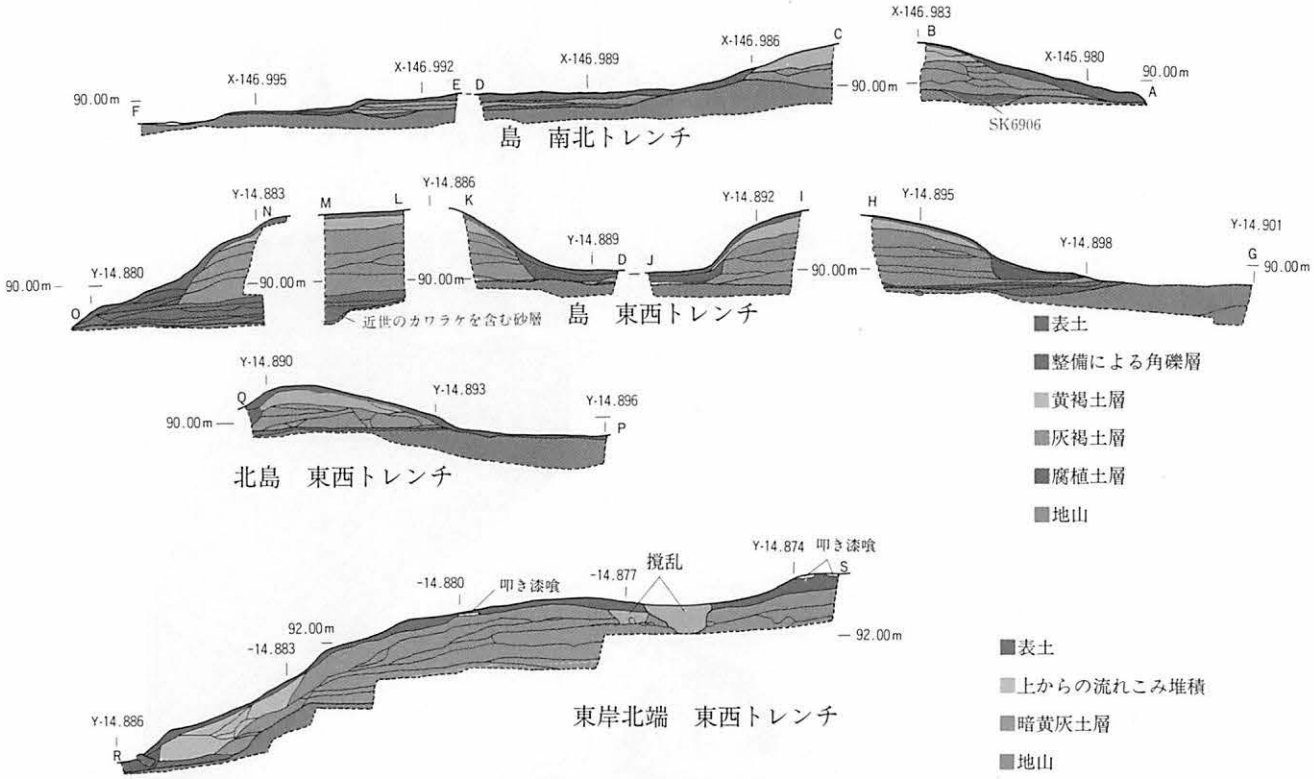

図50　第275次調査　トレンチ断面図

SX6903　SX6902の南西すぐにある叩き漆喰による環状遺構。外径1.8m、内径1.2m。中心に直径約10cmの鉄管を打ち込んでいる。

以上の叩き漆喰による遺構は、平成7年度に検出されたSX6825～6827と一連のもので、鉄管などの利用から近世末もしくは近代のものと考えられる。

平成7年調査で検出された池の洲浜石敷の北延長部にあたるものは、ほとんど検出できなかった。また、拳大の円礫が池岸の立ち上がり部では護岸状に層をなしていたが、人為的なものは検出できず、地山中の砂礫層が露出したものと判断した。池底に散発的にみられる円礫も、この砂礫層からの転石である可能性が高い。また、調査区北端で南北の断ち割りトレンチを入れ、断面を観察した（図50下）が、東半の平坦面から急激に下がって池尻に達しており、池の水位が異なっていたことを示す痕跡は確認できなかった。池の水位が90.0m付近であったとする従来の見解と矛盾する池の堆積状況は認められなかった。また、このトレンチの東半では、厚さ10～30cmの土層の水平な堆積が観察できたが、それぞれの層累面には、小石などが水平にかみ込んでおり、旧地表面であったと考えられる。年代はあきらかにできなかったが、数次にわたる盛り土・利用の繰り返しがあったといえる。さらに、平坦部南西部の小山状の盛り上がりにトレンチを入れ、この盛土が叩き漆喰による遺構を乗せる暗黄灰土と一連のものであることを確認した。

（加藤真二／考古第1）

3　大乗院御所北東隅の調査（第278次）

調査区の概要

発掘区は、旧大乗院御所の西北隅にあたる。室町時代では文明十九年［1487］に竣工した杉御所、江戸時代では隆遍僧正の大乗院指図にみえる「湯釜」「飯釜」「大釜」が、発掘区のわずかに南方に所在したものと推定される。明治以降、御所建築の大半は取り払われたが、春日大社神官家所蔵の指図によると、発掘区をふくむ池の西北区にのみ宅地が残り、そこにはなお多数の座敷・土蔵・雑

舎等がたっていた。その後、国鉄が大乗院の敷地全体を買収し、明治42年に奈良ホテルを朝香山に建設した。発掘区にはホテルの洗濯場と木工所をたてたのだが、それらの付属施設も、ホテルの新館が竣工した昭和58年に撤去され、敷地は駐車場となって現在に至る。

発掘区の土層には、この地の近代以降の歴史が刻みこまれている。現地表面である駐車場の地盤をはぐと、多量のカワラケをふくむ包含層が堆積する。真砂土と玉石をつみあげた近代建物の基礎が、この包含層をほりこんで縦横にめぐる。また、発掘区の南にたつホテル従業員独身寮（昭和19年竣工）のトイレ排尿管掘形が、近代建物の基礎を切り込んで南北に走る。地山面は凹凸がはげしいが、基本的に南に高く北に低い。遺物包含層は薄いところで約0.5m、厚いところなら2m以上で、地山面を確認できない部分も少なくなかった。

遺構

調査では、まず井戸SE6920の掘形を確認した面（L＝89.1～2m）で、発掘区全体の遺構を検出し、その後、南半および北半東壁沿いのみ、地山面（L＝88.7～8m）まで掘り下げて、さらに遺構検出をおこなった。

近代の遺構　発掘区南半で、近代の建物基礎およびゴミ捨て穴と思われるいくつかの遺構を検出した。

SX6926　南半東壁沿いを南北にとおり、北端でSX6927とつながる。幅30cm以上、長さ6m以上の掘込地業で、真砂土と玉石をサンドイッチ状に約80cmつみあげる。SX6927よりも約50cm浅く、土層の切合い関係でみるとSX6927よりも新しいが、これは工程差であろう。

SX6927　発掘区中央東半を東西にはしる掘込地業（幅1.2m×長さ5.1m）。東はSX6926、西はSX6928とつながる。埋土はSX6926と類似し、若干黒色土が混じる。

SX6928・SX6929　南北にながい長方形の掘込に3列にわけて杭を多数打ち込み、その上に5～6本の杭を南北方向によこたえて基礎とする。埋土は真砂土だが、他の掘込地業で用いている玉石はほとんど埋めていない。掘込の規模は、SX6928が東西1.6m×南北2.4m、SX6929が東西1.2m×南北2.3mである。

SX6931　SX6929の南端から南に約2mのび、そこで西へ折れて発掘西壁の手前約50cmのところで途切れる掘込地業。埋土・深さはSX6926とほぼ同じ。

SK6925　発掘区北半の中央北壁よりに位置する。東西1.2m、南北3.8mの長方形土坑で、黒い汚れた土を埋土とするゴミ捨て穴である。

中近世の遺構　発掘区の北半を中心に、中近世の遺構が出土した。

SE6920　発掘区北半中央で検出した花崗岩石組の円形井戸。石組の内径は上端で約1.1mだが、フラスコ状に底がひろくなる。ただし、約1.9mの深さまでほりさげたが、井戸底は検出できなかった。この深さでの内径は約1.25mである。井戸の掘形は遺構検出面で東西約3.1m、南北約3.5mの楕円形を呈するが、通常の掘形とは異なり、断面を漏斗状にほりさげている。深さ約40cmの地点で、井戸の石組内側から約40cmの幅となり、積石背面の裏込幅は約20cmほどになる。井戸の埋土からは、茶碗やガラス瓶が出土しており、ホテルの付属施設が竣工した明治末頃まで活用されていた可能性が高い。掘形からは多量のカワラケ小皿とともに、中世と近世の軒平瓦が1点ずつ出土しており、井戸の掘削年代は江戸時代と推定される。

SD6921　井戸の積石とおなじ花崗岩を用いた石組溝。幅は約20cmで、深さは石の上端から15～20cmである。おそらく井戸とは逆L字形につながっていたものと推定されるが、後世の攪乱により、その連結部分が失われ、南北

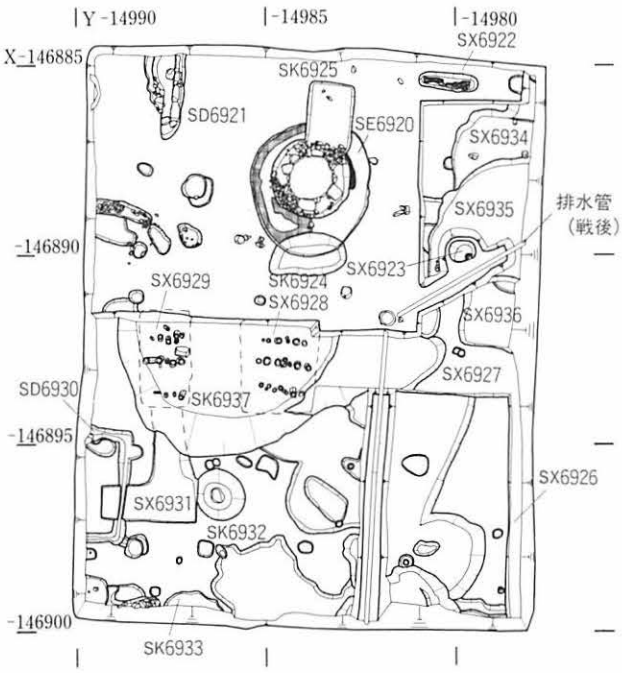

図51　遺構平面図　1：200

方向の部分のみ北壁側に残る。

SX6922・SX6923　柱材と思われる丸太（径約18cm）を含む穴。北側のSX6922は東西1.5m×南北40～50cmの横長の穴に、丸太が途切れて数本よこたわる。南側のSX6923は径が60～70cmの穴で、南東よりに丸太が直立する。この両者は中近世の掘立柱建物跡の可能性がある。

SX6924　井戸SE6920掘形の南端部分を攪乱する土坑。東西約2m、南北約1.1mの横長の不整形を呈する。多量の炭とカワラケ小皿が出土した。

SK6933　多量の赤色土器（カワラケ小皿）が投棄されていた南壁沿いの不整形の土坑。

SX6937　発掘区中央で出土した大きな落ち込み。井戸検出面（上層）では楕円形にちかいが、地山面（下層）ではほぼ円形を呈する。南半部分のみ掘り下げたが、井戸検出面から約1m下げても底はでなかった。

地山面で検出した遺構

SD6930　発掘区南半西壁ちかくにあるコ字形の素掘溝。幅は30～35cm、深さ約15cm。

SK6932　SX6931の東側に接する円形土坑。上端の径約130cm。深さ約70cm。底に人頭大の石をおく。

SX6934・SX6935・SX6936　発掘区北半の東壁沿いで検出した隅丸方形の深い穴(底は未検出)。いずれも井戸の掘形もしくは抜取り穴の可能性があり、SX6935とSX6936は一体の遺構かもしれない。

遺物

地山と表土のあいだの土層から、おびただしい量のカワラケ小皿が出土した。一部では、土坑状の落ち込みに小皿が集中的に投棄されていた。SK6933のように、赤く塗られた小皿が集中して捨てられた穴もある。これらの小皿には、完形のものも少なからずふくまれていた。おそらく神社の祓いなどで用いられる一過性の強い器と思われる。瓦は総重量で約215kg出土した。うち中世の軒丸瓦3点、軒平瓦10点、近世の軒丸瓦8点、軒平瓦1点、棟に組み込む小型菊丸瓦3点を含む。

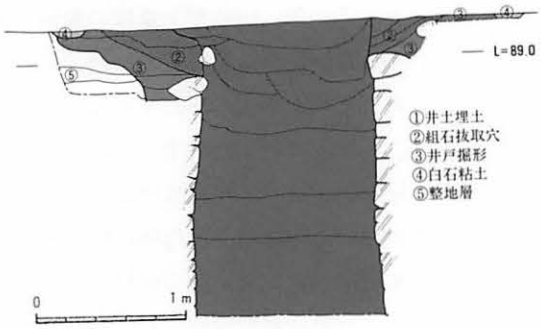

図52　井戸SE6920断面図　1：50

おわりに

調査区では、凹凸のはげしい地形を多量の遺物をふくむ灰褐土で整地し、石組の円形井戸SE6920を掘削している。掘形の出土遺物からみて、SE6920は江戸時代に掘られた井戸であろう。隆遍僧正の大乗院指図にみえる釜屋など雑舎群の北方に近接し、御所の裏方として、釜屋その他に水を供給する施設であったにちがいない。埋土の状況から、奈良ホテルが付属施設を建設する明治末～大正初まで、この井戸が存続したこともあきらかになった。鎌倉時代以来、姿をかえて存続してきた大乗院御所の最も裏方にあたる宅地の様相があきらかになった意義は、けっして小さくないだろう。　（浅川滋男／遺構）

平　城　専（こらむ）欄　③

◆頭塔で27体目の石仏発見

上層頭塔は各面に11基、合計で44基の石仏を配して、造立者の宗教構想を表現していた。このうち、発掘調査着手以前に14基が知られ、従来の発掘調査で12基と抜取り痕跡5ヵ所を確認していた。個々の石仏の図像解釈は、造立構想の復原に不可欠の作業だ。今回、釈迦・多宝仏が出たことによって、東面一段中央の如来も薬師でなく、多宝の可能性が強まり、法華経の影響を取り込んだ華厳経世界観が有力となった。これを実忠の構想とみると、下層の造立構想は、その構造とともに、上層とは相当に異なったはずだ。新たな課題が残された。　（I）